

# 西郷どん

岡崎 良介



岡崎良介オフィシャルサイト  
[okazaki-ryosuke.com](http://okazaki-ryosuke.com)

幼少のころから大河ドラマをよく見ていた。そのせいだと思うが西郷隆盛と言う人のことは、その時々に見るドラマによって、随分と印象が違って見えた。例えば、最初に記憶に残っている「花神」のときは、頭の固いうすのろな武闘派に見えたし、「飛ぶが如く」の時は、人情味の熱い純粹な正義感に映った。他にも、「勝海舟」や「徳川慶喜」、さらには最近の「篤姫」や「八重の桜」、他にも数え上げればきりが無いほどこの人は登場するのであるが、どれを見ても大概のストーリーが、徹底抗戦論を主張し、断固として徳川幕府を武力で壊滅することに固執してきた人物に描かれているためか、個人的にはあまり好きではないタイプの英傑というのが自分の中で結論だった。

とはいうものの心の中のどこかにいつも引っかかっていたのが、司馬遼太郎さんの西郷評である。昔読んだ司馬遼太郎の本の中で、司馬さんは、確か西郷のことを、日本史上唯一の革命家であると言い切っていた。同時に、司馬さん自身が最後まで理解できない人間であったと解説されていたことに、いたく感銘を受けた。司馬さんほどの博識の人でも理解できない、西郷隆盛と言う人物は、一体、どんな人なのだろう。以来、様々な人の西郷伝、西郷論の類の書物を、折に触れて読んだりしていた。

そういうわけで、今年の大河ドラマ「西郷どん」は大変期待していた。ドラマの方は、最初はともただの青春物語風に見え、史実とは異なるのではないか、という懐疑的な見方も生まれて興醒めするところもあったのだが、ここにきてがらりとその印象が変わった。変わっただけでなく、何故、司馬遼太郎が、日本史上唯一の革命家であると言い切った理由が漸く理解できた。西郷隆盛は奄美大島に流刑されて、革命家、西郷に生まれ変わったのである。

ドラマを見ていない人のために、ざっとあらすじを書くと、まだ薩摩の若手の小役人にすぎなかった西郷が、主君、島津斉彬に見いだされ、時代の先端を駆け巡るのであるが、その主君が夭折し、運悪くこれが井伊直弼の“安政の大獄”のタイミングと重なり、幕府のお尋ね者となってしまう。自殺未遂にまで追い込まれ、何とか一命を取り留めたところで、奄美大島に流刑者として送られるのであるが、今回の大河は、歴史上、あまり語られることのないこの奄美大島での暮らしの話を、何と3週にわたって描いている。これがすごかった。

放送を見たひとは気づかれたと思うが、いきなり最初のシーンから、入れ墨を彫った女性の手がクローズアップされることから始まった。私が信頼する歴史学者磯田道史さんは、著書「素顔の西郷隆盛」の中で、ここで西郷が見たのは、日本の中でも最も過酷な人権の否定であった、と書いている。そして西郷の維新革命思想を育んだ大きな要因は、この島暮らしにある、と司馬遼太郎同様に、“革命家”として西郷を評している。これで漸く合点がいった。

島の人々は差別され、搾取され、基本的な人権も何も与えられていない。差別し、搾取し、人権を奪っているのは、西郷が所属する薩摩の人間である。いくら憤ってもその仕組みはそう簡単には変わらない。そんな仕組みを誰が作ったかと言えば、それは突き詰めれば徳川幕府である。ならば徳川幕府を倒すしかない。倒してこんなひどい仕組みを潰し、差別され、搾取され、人権を否定されている島の人々を解放するのが、自分の新たな使命である。ここから西郷隆盛の、討幕、廃藩置県、文部省の設置、新たな学制の発布、身分制度の撤廃、士華族、平民の通婚の許可、被差別と身分の呼称の廃止、農民の職業自由化宣言、人身売買の禁止と、今日に続く平等社会の実現への一歩が始まったのだろう。そう考えることで、全てが腑に落ちた。

あっさりと腑に落ちたと書いたが、その理解までのプロセスはこうである。まず、何よりも、西郷が奄美大島で娶り、後に藩のおきてで別れさせられることになる現地妻“愛加那”を演じた二階堂ふみさんが、あまりに素晴らしかった。あまりに素晴らしく、美しかったがゆえに、ただのテレビドラマであり、歴史の事実として結末を知っているはずなのに、島での二人と子供たちの幸せな暮らしを引き裂く薩摩藩、ひいては徳川幕府体制に、本気で腹が立ってしまったのだ。そして腹が立って、熱くなって、ついには腕組みをして真剣に“どうすればいいのだろう”と社会問題として考えるまでに至ってしまった。

ああそうか、と我に返って冷静になった瞬間に、先ほどの、“革命家”西郷隆盛という人物像が、ぽっかりと見えてきた。島の人々と、愛加那と子供たちを解放するために、明治維新は成し遂げられたのだ。そう考えると、西郷隆盛が座右の銘として「敬天愛人」という言葉をよく書き綴っていたことも結びつく。何事も、熱くならないと本当にはわからないようだ。

岡崎 良介



岡崎良介オフィシャルサイトでは、  
ビデオマガジン・週間戦略・月次ミーティング等  
様々なサービスを提供しております